生命なき街

城山三郎

新潮文庫

生命なき街

新潮文庫　し－7－6

昭和五十二年四月三十日　発行
昭和六十三年十月十日　二十刷

著者　城山三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替　東京四－八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎　製本・加藤製本株式会社
© Saburô Shiroyama 1977 Printed in Japan

新潮文庫

生命なき街

城山三郎著

新潮社版

2393

目次

神武崩れ……七
生命なき街……六三
挑戦……九一
老人の眼……一三一
鍵守り男……一九九
白い闇……二三七
解説　常盤新平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生命なき街

神武崩れ

四月一日

○所得税等いわゆる一千億円減税実施

○国鉄運賃平均一割三分値上げ実施

三日

○第十三次計画造船の公募締切る。応募は六十九隻六十万一千四百総トンで、計画の三十九万八千総トンに対し倍近くに上った

六日

○大蔵省、三十一年度の貿易通関実績を発表

輸出　二十億九千七百万ドル

輸入　三十六億二百万ドル

輸出入とも戦後最高

十一日

○三十一年度の貨物輸送、戦後最高

国鉄では三十一年度の貨物輸送実績は一億七千三百四十三万二千トンと発表。戦後最高

十二日

○通産省、三十一年度の輸出認証額は二十億九千七百万ドルで前年比二二・二%の増加と発表。

戦後最高

○来日中の世界銀行調査団は世界銀行は対日借款についてこれまでより弾力的に考えたい、インパクト・ローンを検討してもいいと語った

十五日

○通産省調の三十二年度産業設備投資計画まとまる。これによると総額八千四百九十二億円で、前年度実績比三二・九％増となる

「景気のいいニュースばかりだ」

受話器を耳にあてたまま、風岡はひとり言のように云った。尼ヶ崎はまだ出ない。

「何や、それ」

向い合った机に頬杖をつきながら、福地が訊く。

「三銀の調査月報だ。今月から入っている」

頁を閉じて、表紙を見せる。全面が菜種色の中に、暗緑の短冊を二本走らせ、そこに「三友銀行調査月報」「一九五七年五月号」の二連の文字が白く浮き出ている。そのまま短歌雑誌の表紙にしてもおかしくないような、やわらかな渋みがこめられている。

「三銀だって？　三銀が入ったんか、東洋物産に」

「先月からうちの取引銀行になった。Y銀に加えて。……三銀の森から話を持って来たんだ。ぜひ融資したいと云ってね。経理部長に紹介してやり、結局借りることになった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そう云えば、君のところの常務の娘が、たしか三銀の副頭取の息子のところへ嫁いでいたな」
「よく覚えてるね」
「同業者、いや、一度は見合いした相手のことだから」
「気まずい相手だなあ」
二人は苦笑した。
福地の勤めている三友商事は、新興の東洋物産と異なり、三友銀行を親銀行とする旧三友財閥系の企業で歴史も古かった。幅広い品目を取り扱ってはいたが、金属部門が手薄だった。たまたま東洋物産が金属・機械部門に重点を置いているところから両社の間に合併談が起ったことがあった。「見合い」とは、そのことを指していた。しかし、社名や役員の椅子の配分などで、両者が張り合って折合いがつかず、その後は両社の社員間にまで気まずい反目が生れていた——。
耳の下から交換嬢の声がした。長距離通話を知らす低いサインが聞えてくる。風岡は受話器を握り直した。
尼ヶ崎支店が出た。〈鋳鋼カルテルが先物の原料の手当（入手）をやかましく催促してきている。間に合わねばM物産に頼むと脅かされている〉との電話である。
風岡は福地の視線を顔一面に感じながら、〈できるだけ早く輸入許可（ライセンス）をとるから〉と釈明した。支店の男は何度も「早いこと頼みまっせ」と繰返し、電話は切れた。
受話器を置くと、すかさず福地が、
「輸入許可下りんのか」

「遅れてるんだ。通産省へ日参して尻を叩いてるんだが」
「係は誰や、二課か、三課か」
探りを入れてくる福地をちょっと眼で抑えるようにしてから、マッチを擦り、
「申請書を引出の中へ抛りこんだきりで、いそがしいからとばかり云ってやがるんだ」
「飲ませんと、あかんのやないか」
「それもあるかも知れん。だが屑鉄は輸入特別措置でほとんど無条件パスの筈。それを知って、却って厭がらせをしてるんだ」
担当官である輸入二課伊賀井の眼鏡をかけた蒼黒い顔、業者に向うと回転椅子の背に頸筋を凭せ、煙草の輪を吹き上げながら話す様子を思い出した。ジョージア渡し屑鉄七千トンの輸入許可申請書を出して二週間近いのに、伊賀井は輸入許可を渡してくれない。忙しいから、仕事がつかえているから、などとうるさそうに云う。〈煙草喫う間があるなら、捺印しなさいよ〉と、くわえている煙草をもぎり取ってやりたい衝動を感じたこともあった。金属課長代理、三十五歳という年齢が辛うじてそういう衝動を抑え、風圏を根気よく通産省のくすんだ建物へ通わせていた。あの七千トンさえ入れば、鋳鋼カルテルの方もO・Kだし……。
「鉄はいいなあ、儲けが大きいから。とにかく輸入さえすりゃ儲かるんだから」
「お互さまだ」
「いや。うちみたい黄変米や云って叩かれることもないし、大人しゅう仕入れてはごそっと儲ける。……うちも金属部置こうかと云うてるぜ」

終りの言葉に風岡ははっと緊張したが、顔には出さず、
「それ程でもない。海上運賃が騰るばかりで、屑鉄の儲けと云っても全部船会社行きだよ」
「船会社と云えば、くどいようやけど……」
と、福地は両肘を滑らせ、顔を突き出してきた。
「たのむ。助けてくれ。P・Oラインを使ってくれ」
右掌を拝む恰好に挙げて云う。
「その輸入許可が下りれば船が要るのやろ」
「もちろん要る。だが、うちはA・Cラインと特約を結んで、その船を使うことになってるんだ」
「それは分ってる。無理やろ。無理やと思うから、それ、こんなに頼んでるやないか」
風岡は黙って、福地の顔を見つめた。顎の尖った小さな顔に、眼だけが入りきれず飛び出たように大きい。従兄とは云いながら、この顔のどこが笹上悠紀子と似ているのだろう。
何気ない会話の時には、栗色がかった瞳が悪戯っぽく躍る——その点だけは、悠紀子と共通しているようだが、ビジネスに入ると、すっかりそれも消えてしまう。憑かれたような薄い唇の回転は、大学時代の福地の面影さえ吹き消している。
「岸田常務は鋼材使節団で、またアメリカからどっさり買付けてくるんやろ」
大きな眼で福地は壁の貼紙を指差す。
電気時計が六時五分を示している。その下に、ポスター用紙がセロテープで四隅を留めて貼っ

てある。文字は黒のマジック・インキ。

岸田常務の鋼材使節団
今夜十二時半のP・W・A機で羽田発
但し見送りは固辞との申越しあり

朝から幾度となく見たその貼紙に、風岡も誘われて眼を走らせた。金属課長欠員のままに課長代理をつとめている風岡は、営業部長兼務の岸田常務に直属しており、見送りをやめる訳にはいかない。それにしても「見送り固辞」なら、なぜ、「今夜十二時半」のところに赤インキで傍点をつけたのかと、風岡は腹立ち疲れた眼で貼紙を見上げていた。その耳に福地が、

「君のとこで救ってくれなけりゃ、六千万円の損や。海上運賃(フレイト)そのまま違約金(ペナルティ)にとられるからな。……俺は当然クビや、俺や俺の妻子を助ける思うて、P・Oライン使ってくれ、な」

「他の商社へ持っていったらどうだ」

「駄目や、俺の知ってるとこで大きな荷を入れてるのは君のとこだけや」

「……」

「海上運賃だって一トン六千円。決して高うない。今はもっと騰ってる」

「海上運賃の問題じゃないんだ」

風岡の語調に福地は黙って、眼をなお大きくみはった。

「A・Cラインと特約してる当社(うち)が、たとえどんな理由があるにせよP・Oライン使ったという

ことが分った時のことだ。アメリカの船会社はうるさいから、どんなトラブルが持ち上るか知れん。それを常務は心配してるんだ」

「分りゃせんよ。……もし分ったら、うちで責任持つわ」

「どんな風に」

「……。ともかく分りゃせんよ」

自信のない声で云いながら、福地は始めて眼を伏せた。

学生時代から福地は押し強く口達者であったが、競争相手の三友商事に入り、五年ほど大阪船場支店に置かれてからは、関西弁まじりで一層饒舌になってきた。関西風のやわらかな語調を利用し、安心して押し強さを発揮しているとも云えた。そうした福地が形だけでも萎れた風を見せているのに、風岡の心は開いて行った。

三友商事では福地が担当し、一万トンの燐鉱石輸入を計画、P・Oラインとの傭船契約を結んだ。ところが燐鉱石輸入がストップとなり、傭船契約の責任が福地にかかってきたのである。燐鉱石にせよ屑鉄にせよ、その代価よりも船賃の方が高い。契約破棄の場合いつも問題を起すのは、船会社との間であった。特約関係にある会社の間ではそれ程でもないが、最悪の場合は海上運賃契約額の全額を違約金として支払わねばならない。その負担を切抜ける道が、同一航路を通る他の商社の積荷で肩代りして使ってもらうことであった。違約金減額を交渉する方法もあるのだが、厄介な割に話はつきにくい。肩代りの荷主を探すことが、商社にとっては時には社運を賭けるような重大事になる。

顔を伏せた福地の小柄な身体は、机の向うの端で、身を丸めた毛虫のように見えた。福地がやり手の商社員であるだけに、「二万トン六千万円」の数字が、人一倍大きく、重く、彼を圧しているのが分った。

肩の高さと並行に垂れた福地の頭に、風岡は呼びかけた。

「今夜、もう一度、常務を押してみる。……さあ同窓会へ行こう」

「たのむ」

呻くように云いながら、福地は顔をあげた。

その夜は珍しく身体の空いた風岡を、福地がS大経済学部の同窓会にと誘いに来たのである。福地の本心は、肩代りの交渉にあったのであるが、風岡も久しぶりに母校の空気に触れたくなった。それに母校の経済学部長である辻村教授の『最近の景気動向について』と云うスピーチも聞きたかった。辻村教授は永年、経済予測を研究し、現に経済五カ年計画の立案者の一人でもあった。二年近い好景気、まわりは強気ばかりであり、屑鉄輸入に当る風岡はその強気に追いまくられ、押しまくられている形であった。圧倒的な強気には、快い重量感さえある。風岡はその重量感に、辻村教授から箔づけしてもらいたかった。

二人は車でJ会館へ向った。

走って行く車の中に、夕日と並木の影が戯れ合いながら落ちてくる。

風はなく、神田橋のあたりでは、納い忘れた鯉幟りが、色褪せた尾を下げていた。

J会館に着くと二階ホールの同窓会場では、辻村教授のスピーチがすでに始まっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com